



**自己紹介**

1965年高柳町門出生まれ。  
柏崎商業高校卒業後18才で上京  
22才で帰郷し就農

<家族>  
母親・妻・子供3人・孫3人

<栽培歴>  
米・麦・豆・そば・牧草・フルー  
ットマト・メロン・ほうれん草・  
薬草など

<職歴>  
高柳町自立経営農業者会議会長  
新潟県青年農業者会議会長  
日本青年農業者会議副会長  
柏崎刈羽指導農業士会会長  
現在は新潟県指導農業士

<農外所得>  
除雪オペレーター・大型ダンプ  
運転手・製縄工場・鳶・大工・  
石工などの手伝い



「住んでよし訪れてよし」の町づくり  
高柳町ふるさと開発協議会報告書

平成2年3月  
新潟県高柳町

今から30数年前、高柳町の若者・役場・全国の学者や専門家があつまって「ふるさと開発協議会」が組織されました。

2年間に200回の協議を重ね「住んでよし訪れてよし」の町づくりと言う報告書を作り上げました。

## 村おこしの時代に帰郷



田舎での生き方に悩んでいた私はこの報告書を読みふけりました。

廃れかけているように見えた田舎での暮らし方そのものが財産であると思えるようになりました。

棚田・山菜・薬草・天然キノコ・山ウサギ(当時イノシシはいない)・ヤマブドウの蔓やアケビの蔓etc…は宝の山！

## 田舎暮らしに一筋の明かりを見つけた



農業機械の参入で米の単作農家が増え、我が家で販売していたきな粉の原料が不足。

「加工して販売した方が儲かる」という考えのもと耕作放棄された桑畑を借りて青豆の栽培を開始しました。

当時は田んぼはまだやり手があつて借りることはできませんでした。

あれから30年、米は自由化・米価下落…。米を作っていると生活ができないという時代になりました。

## 耕作放棄地で 青豆栽培をスタート



青豆は少しずつ面積は増えてゆきましたが連作障害という問題が発生し、輪作に取り組むことになりました。

町内にあるパン屋さんからのオファーにより小麦の栽培を取り入れることにしました。

豪雪地での小麦栽培は実証がなく、自分で試してみるしかありませんでした。

## 連作障害をきっかけに 豆と小麦の輪作に取り組む



小麦栽培も経験を積みながら  
7年目には350キロの収量と  
Aランクという品質をあげる  
ことができました。  
(21年産小麦の全国平均レベ  
ル。反売上で言うとコシヒカ  
リ10俵と同じ売上)

農協出荷はせず、パン屋やブ  
リュワリーへ直接販売してい  
ます。  
小麦の流通について、ひとつ  
ひとつ知ること新しい感激  
がありました。

## 豪雪地でも Aランクの小麦栽培が実現



## 報告書が教えてくれた 背景が伝わるような商品づくり



## 米にも可能性あり 《三馬力舎の事例》

- ・松代と津南で馬で田を耕し、五百万石（酒米）を栽培している
- ・四合瓶1本10万円で日本酒を販売。昨年は2000本を生産し、全部売れると2億円の産業に！



「生産者と消費者」から、対等に手が結び合える「作り手と使い手」の関係へ。

正直な物作りと暖かい関係が無ければ農業を目指そうという人も、中山間地農業を守ってゆくことも難しい。

価値の高い歴史・文化・自然環境があるこの地で最先端の魂を持って農耕に取り組んでいけば、とても魅力的な仕事であり地域であると思われのではないでしょうか。

## 正直な物作りと暖かい関係で 地域と農業を守りたい



山のあなたの空遠く、幸い人の住むという

報告書の序章にカールブッセの詩が引用されています。

「山あいに住む人が、山一つ越えた向こうの世界の人々とふれあい、つどうことをいかに強く願っているかが伝わる」と訳しています。

美しい農村の姿や真を尽くした物作りの姿が世の中にどれだけ貢献していることなのかを示すことで、これからの若者が好奇心を持ってこのような生き方・暮らし方を選んでくれるようになって欲しいと思います。

## カールブッセの詩に想う 「人材育成は好奇心の育成」